高校生が考える理想的なコワーキングスペース

１年１組　藤岡　希羽　１年３組　畔地　将志　１年３組　井上弘一朗
１年３組　宅見　　遥　１年３組　野田明日香　１年３組　山本　　仁
指導者　尾﨑　真紀

１　課題設定の理由

私たちが住む宇和島圏域では、急激な人口流出が起きている。そこで、「帰ってきたい宇和島」を目指すべく、「コワーキングスペース」と画期的なコラボをし、高校生たちの意見を取り入れて宇和島を発展させようと考えた。

２　仮説

コワーキングスペースを拠点とするまちづくりをすると、関係人口(*1)の増加と共に町に賑わいが生まれるだろう。

３　研究の方法

(1)　アンケート（図１）（図２）

全校生徒を対象に、Forms でアンケートを実施する。

(2)　オンライン調査（図２）

鬼北町と松野町の２か所のコワーキングスペースＡ, Ｂにオンラインインタビューを行う。

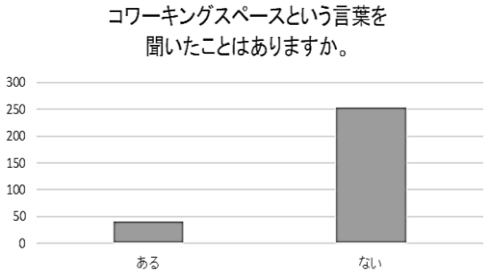
(3)　ホリバタ(*2)との共同研究

・コワーキングスペースの「実際」と「現状」を知る。
・ワークショップを通じて、理想的なコワーキングスペースを考える。

４　結果と考察

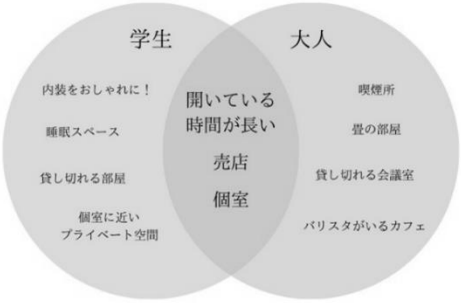
(1) アンケート結果,

・コワーキングスペースの認知度(図１)　（調査対象：宇和島東高校の生徒約 300 人）



「コワーキングスペース」という言葉を聞いたことがある生徒の割合は約 20%に留まっており、あまり知られていないことがわかった。しかしアンケート結果から、利用したことがある生徒もいることがわかった。

・ 年齢層によるコワーキングスペースに求めるものの違い(図２)
（調査対象：宇和島東高校の生徒約 300 人、大人はオンライン調査より）



結果の詳細
・内装をおしゃれに（学生）・睡眠スペース（学生）
・畳の部屋（大人）・貸し切れる会議室（大人）
・開いている時間が長い（共通）・個室（共通）

(2) オンライン調査の結果

主に、①現状、②課題　の視点で聞き取りをした。その結果が以下のとおりである。

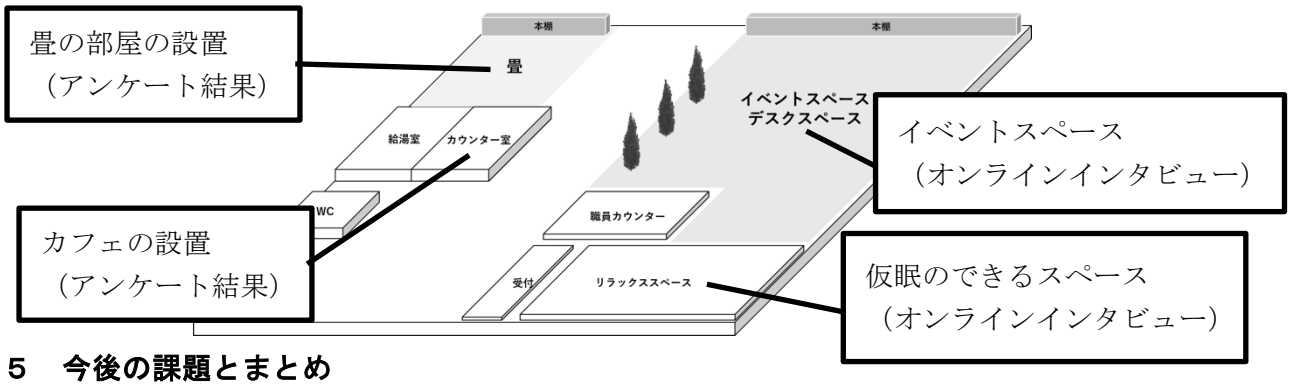
対象	現状	課題
コワーキングスペースＡ	地元の高校の人たちと製品開発をすることによって、高校生との交流を深めている。	地域の人たちが求めているものがわからない。 所在する町の人だけではなく、南予全体から来てほしい。 リピーターを増やしたい。
コワーキングスペースＢ	2020 年にまちおこしの拠点を作るために始めた。地元の人たちで不定期で読書会などイベントを行っている。	お金は出ていくが、収入がない。 もっと活動を活性化させたい。

(3) ホリバタとの共同研究

実際にホリバタへ足を運び、コワーキングスペースに求められているものについてワークショップを開き、共同研究をした。

(4) 理想的なコワーキングスペースの考案

⑴～⑶でわかった課題と研究をもとに、それを解決するための理想的なコワーキングスペースを構想した。ホリバタとの共同研究（ワークショップ）で、過ごしたくなるワークスペースを考えた。そのイメージ図が以下の通り。



５　今後の課題とまとめ

コワーキングスペースは多世代にとってライフキャリアデザインを中心に多くの価値を作り出す場所であった。しかし、コワーキングスペースの存在を知らない人がまだ多い。この現状を変えていくためには、コワーキングスペースの意義と広報を学校で行うことを提案する。なぜなら学校でのキャリア教育とこのコワーキングスペースの取り組みは関係性があるからである。これからも新しい時代のコワーキングスペースの変容に注目していきたい。

脚注

*1 関係人口…移住した「定住人口」、観光に来た「交流人口」ではなく、地域と多様に関わる人々を指す。

*2 ホリバタ…宇和島市にあるコワーキングスペース。

参考文献

・松村茂. ″テレワーク社会が開く地域社会―地域社会におけるテレワークとコワーキングスペースの考察―.″（2020）